

< 翻 訳 >

叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXII) ¹—

茂木 秀淳 信州大学教育学部社会科学教育講座

キーワード：ダルマ，ヴァルナ，運命論，幸福

[286 章] (B.297 章, C.10900-10941, K.303 章)

パラージャラ仙は言った。

- (1) 父・友人たち・師匠たち・(師匠の)妻たちは、世間で徳なき者たちと言われる者ではない²。他の者を信仰せず、心地よき言葉を話し、親切で、従順な者たちも同様に(徳なき者ではない)、王よ。(韻律 Triṣṭubh (Upajāti))
- (2) 父は、人々にとって最高の神である。父は母より優れていると人々は語る。知識の獲得は最も優れたことであると言われる。感官の対象を制御する者たちは、最高位に達する。(韻律 Triṣṭubh (Upajāti))
- (3) 矢の火が覆う戦場において、打ち倒されて焼かれる王の子は、神々によっても得るのが難かしいもろもろの世界に赴き、意のままに (yathśukham) 天界の果報を享受する。(韻律 Jagatī (Vaṃśasthāvila)) (Cf. Otto Strauss[1912]: p.209(17) fn.1; 原 [1968]-2: p.440.3-7)
- (4) 疲労した者、恐れる者、武器を失った者、泣いている者、顔を背けている者、従者たちのいない者³、起き上がれない者⁴、病人、懇願する者、そして子供と老人を殺し

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXXI)—』(信州大学教育学部研究論集第6号(本号))に続くものである。略号などは前稿に準ずる。本稿で用いる主なものは以下のとおりである。

- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS vol.23, pp.109-155, 1902.
- Otto Strauss[1912]: Otto Strauss, *Ethische Probleme aus dem "Mahābhārata"*, Tipografia Galileiana, Firenze, 1912.
- 原 [1968]-2: 原 實「KṢĀTRA-DHARMA(下) 一古代インドの武士道一」, 東洋学報第51巻3号, 昭和43年, 456-420 ページ
- Hara[1987]: Minoru Hara, *Invigoration, Hinduism und Buddhismus*, Festschrift für Ulrich Schneider, Freiburg, pp.134-151, 1987.

²P. na nirguṇā nāma bhavanāti B.,K.: na nirguṇānām prabhavanti Cn. nirguṇānām, bhaktyādhīnānām / (「徳なき者たち」とは、誠信などを欠いている者たちのことである)

³P. paribarhaiś ca hīnam B.,K.: pāribarhaiś ca hīnam Ca.,Cp.: paribarhair, vāhanādibhiḥ parikaraiḥ / (paribarhair とは、馬などによって随行する者たちのことである) Cn. pāribarhair, rathāśvakavacādibhiḥ / (pāribarhair とは、馬車・馬・鎧などである)

⁴P. anudyataṃ B.,K.: anudyantaṃ P. は ud-i の現在分詞弱語幹, B.,K. は強語幹を用いている。ここでは強語幹が期待され、a 句では用いられている (rudantaṃ 泣いている者)。 N. anudyantaṃ āyudham aprerayantaṃ udayahinaṃ vā / (anudyantaṃ とは、武器を使うことができない者、あるいは立ち上がることができない者である)

てはならない、王よ。(韻律 *Triṣṭubh* (*Upajāti*?)

- (5) (それに対し)王は、会戦においては、従者を十分伴い⁵、立ち上がり、対等になったクシャトリア出自の者 (*ātmaja*) に打ち勝つべし。
- (6) この世で同等の者によって、そしてすぐれた者によって殺されることは栄誉である、と定まっている。劣った者や臆病者によって殺されるのは、王たちにとっては⁶非難されるべきものである。
- (7) 悪行の者によって、悪行に類した行為をなす者によって (*pāpasamācārāt*)、そして生まれ卑しき者によって殺害されることは、人の王よ、まさしく罪悪であると言われ、地獄へ導くものと定まっている。
- (8) 死の支配がやってきた者を誰も救うことはない、王よ。寿命に残りがある者でさえも、誰かが連れ去るのである⁷。
- (9) 愛着の強い人々によって (*snigdhaiḥ*) 行われている世間でのもろもろの行為を止めさせるべし⁸。そして殺生を本質とするもろもろの行為を⁹(止めさせるべし)。他人の寿命によって¹⁰(自分の) 寿命を願うべきではない。
- (10) 滅を望み¹¹、行為に従事する家長たちにとって、川岸の砂上での (*pulineṣu*) 死はめでたきものである。
- (11) 寿命の消滅に至ると、人は五種 (の元素) に至る。それは原因なしに¹²生じることはなく、さまざまな原因によって引き起こされるのである¹³。

⁵P. *paribarhaiḥ susaṃpannam* B.,K.: *pāribarhaiḥ susaṃyuktam* Deussen: den mit Hilfsmitteln wohlausgerüseten, Ganguli: who is equipped with mail and cars and horse and infantry (vol.IX, p.362)

⁶P. *nṛpāṇām* B.,K.: *kṛpāṇād*

⁷P. *kaścid evāpakarṣati* B.,K.: *kaścin naivāpakarṣati* P. と B.,K. では意味が反対になる。P. は、「たとえわずかに寿命が残っていても」の意味か。

⁸*snigdhaiḥ ca kriyamānāni karmāni* N. *snigdhair mātṛādibhiḥ kriyamānāni abhyaṅgādini* / (*snigdhair* とは母親などであり、行われている行為とは、塗油などである) *snigdha* が何を意味するか曖昧である。ニーラカントは母親などととり、母の行為としては不適切な行為として、本来召使いがすべき塗油などとしている。Ganguli もこの解釈に従って詳細な解説を付している。(vol.IX, p.363, fn.2) しかし *snigdha* を執着の要素が強いととることができれば、この詩節の意図に対応している。

⁹P. *karmāni* B.,K.: *sarvāṇi* B.,K. は、*karmāni* が b 句と c 句で重複して使われるのを避けたか。

¹⁰*parāyusā* Cp. *parāyusā, param prāpya māmsabhakṣaṇena na svajīvanam icchet* / (「他人の寿命によって」とは、他人を獲得して (?*prāpya*), 肉食によって自らの命を願うべきではない) Cv. *parāyur nāsayitvā svayaṃ na jīved ity arthaḥ* / (他人の寿命を減さしめて、自分は生きるべきではない、という意味である)

¹¹*vināśam abhikāṅkṣitām* Cn. *vināśam, bandhakṣayam / yadvā, viḥ pakṣiḥ paramātmā, tena (iṭhaṃbhāve ṛṭiyā (Pāṇini 2.3.21) paramātmabhāvena, śaṃ paramānandam abhikāṅkṣatām ity arthaḥ* / (「滅」とは、束縛の消滅である。あるいは、(*vināśa* の) *vi* は鳥であり最高我である。それによって (*vināśa* の *na* を含む *tena*)(この場合具格) すなわち最高我の状態として、*śaṃ*, すなわち最高の歡喜を、望む人々にとって、という意味である) Cp. *vināśam, svajīvanārthaṃ paranāśam ākāṅkṣatām* / (「滅」とは、自分の命のために他人の「滅」を望む者たちにとって、という意味である)

¹²P. *nākrāraṇād* B.,K.: *tathā hy akāraṇād (hypermetric)* Ca.,Cp.: [*na*] *ākāraṇāt* (Cp. *akāraṇāt*), *prayatnādīvinā* / (「*ākāraṇa* なく」(Cp. では、「原因なしに」)とは、努力などなしに、という意味である)

¹³*kāraṇair upapāditaṃ* Ca. *kāraṇaiḥ, īśvarādṛṣṭakālādibhiḥ, upapāditaṃ, arjitaṃ* / (「さまざまな原因」、

- (12) そして、それによって (yena ある原因による寿命の消滅), 身体から¹⁴(別の) 身体が生ぜしめられる。この者は (解脱の) 道を歩く者である¹⁵。しかしこの者は、(解脱に至らず) 家から (別の) 家へと達したのである¹⁶。
- (13) そこには (tatra 解脱への道), 第二の原因としては他に何も存在しない。靈魂たちのその身体が¹⁷, 解脱をめざす者たちに (?)¹⁸結びついて存在しているのである¹⁹。
- (14) 脈管, 筋肉, 骨が集合し, 嫌悪すべきものと不浄のもの (amedhya) に満ち, もろもろの元素と感官と (元素の) 性質 (?guṇānām)²⁰の集合した²¹,
- (15) 皮膚を端とするものが身体である, と大我を考察する賢者たちは (adhyātmacintakāḥ) 言った。もろもろの (元素の) 性質 (guṇair) が滅しても, 身体は死すべきものとなるのである²²。
- (16) (身体は) 靈魂 (śarīrin) に捨てられると, 動きがなく意識 (cetanam) が去り, もろもろの元素が元の状態に達することによって²³, そのために地中に沈むのである。
- (17) この身体はあちらこちらで死に, 行為との結合によって形作られて (bhāvitam), あちらこちらで生まれるのである, ヴィデーハの王よ。その (身体の) 本性は (前の身体と) 異なると観察される 為の発現 (visargaḥ) も同様 (に異なると観察される)

すなわち自在神・不可見力・時間などによって、「引き起こされ」すなわち、得られたのである) Cn. upapāditaṃ, haṭhena jalapraveśādinā sampāditaṃ / (「引き起こされ」とは、力づくで、水の侵入などによって生ぜしめられた、という意味である)

¹⁴dehād Cn. dehāt Iyablope pañcamī (Vārttika on Pāṇini 2.3.28) dehaṃ prāpya / (dehāt とは、kṛt 接辞 ya が消滅した場合の奪格であり、身体に到達して、という (Gernud の) 意味である)

¹⁵adhvānaṃ gatakaś cāyaṃ Cs. gatakaḥ, kapratyayaḥ kutsāyām / (「歩く者」すなわち gataka の接尾辞 ka は軽蔑・非難の意味において用いられている) N. so 'yam adhvānaṃ mokṣamārgaṃ gato 'pi kutsitatvād adhvānaṃ gatakaḥ / (この者は、道すなわち解脱の道を行く者であっても、非難に値する性質のために、道を歩く者 gataka と呼ばれるのである) 非難の理由は、特に解脱を目指しているわけでもではなく、輪廻の中を進行しているにすぎないから、ということであろうか。

¹⁶Ganguli は、この詩節の意味を、「突然死んだ者は、解脱に至らず、次の生も身体を得て、同じような人生を送るのである」というように解している。(Ganguli IX, p.363,fn.5)

¹⁷taddehaṃ dehinām yuktaṃ Cn. taddeham, klibatvam ārṣam / (「その身体」とは、(他の身体の原因とならない) 無力性であり、古形である) N. は身体を yātanā-deha と karma-deha に分け、前者は享受の身体 (bhogadeha) であるため、他の身体を生み出す能力はない、すなわち無力であると解釈している。

¹⁸mokṣabhūteṣu Cp. mokṣabhūteṣu jīvanmukteṣu yathā apekṣāṃ vinaiva śarīraṃ tiṣṭhati, tadvad anyasyāpiti bhāvaḥ / (mokṣabhūteṣu すなわち、生存中に解脱した人々においては、必要性はないのに身体が存在しているように、それと同様に、もう一方にとっても、という意味である) N. dehinām so 'pi yātanādeho mokṣabhūteṣu mokṣayogyeṣu rudrapīśāceṣu yukta ātmahatyāpāpaniraharāṇāya yātanārthaṃ yojitaṃ vartate / (もろもろの靈魂にとつて、その報いの身体もまた、「解脱に向かうものたちにおいて」すなわち、ルドラやピシャーチャたちにおいて、「結びついて」、自分殺しの罪を除去するために、すなわち報いのために、結びついて、存在している)

¹⁹Ganguli は、この詩節の意味するところを、「聖地で死んだ者は、ルドラやピシャーチャとして再生し、シヴァ神との近接の結果、時を経ずに解脱するのである」というように解している。(Ganguli IX p.363, fn.6)

²⁰bhūtānām indriyānām ca guṇānām ca N. guṇānām viśayāṇām vāsanāmayānām / (guṇa は、潜在力よりなる対象である) N. に従えば、感官の対象、すなわち、色など元素の性質を意味することになるが、はっきりしない。

²¹samāgatam Cp. samāgamaṃ, samāhāram / (samāgamam とは、集合である)

²²guṇair api pariṅśinaṃ śarīraṃ martyatām gatam / N. guṇaiḥ saundaryādibhiḥ martyatām vāyavīyam api pūrvavāsanāvāśān manuṣyatām iva gatam / (guṇaiḥ すなわち美しさなどによって、martyatām すなわち風に属するものであっても前世の潜在力の力によってあたかも人間であるかのごとくとなるのである)

²³bhūtaiḥ prakṛtiṃ āpannais Cs. prakṛtiṃ āpannaiḥ, mahābhūtaiḥ svām yoniṃ prāptaiḥ / (「元の状態に達することによって」とは、もろもろの大元素が、自分の源に達することによって、という意味である)

- (18) 人は (ayaṃ), しばらくの間, 再生しない, 王よ。生き物の本体は²⁴, 大きな雲が空を漂うかのように, さまようのである。(Cf.Hopkins[1901]: p.372, "some time" between births)
- (19) 彼は, 王よ, この世における拠り所 (āyatana) に達して再び生まれるのである, 人の主よ。アートマンはマナスより高位であり²⁵, マナスは感官より高位である。(sandhi irregular: ātmā indriyebhyaḥ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2 Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.1 -a/ā i/i pp.7-8) (Cf.Haas[1922]: No.363; Kaṭha Up. 3.10, Hopkins[Great Epic]: p.131,fn.1, *para ladder*)
- (20) 二種の²⁶生き物たちのうち, 動く者たちが上位である, 王よ。動く者たちのうちでは, 二本足の者たちが上位と考えられる。二本足の者たちの中では, 再生族たちが上位であると伝承されている。
- (21) 再生族たちの中では, 英知ある者たちが上位と考えられる, すぐれた王よ。英知ある者の中ではアートマンを認識する者たちが (上位であり), (アートマンを) 認識する者たちの中では, 自惚れなき者たちが (上位である)。
- (22) 人々の間では, 生まれた者は死に赴く, と定まっている。なぜならば, 人々は, 性質に従って²⁷, (効力に) 終りある行為を行うからである。
- (23) 太陽が北方に達する時に死に赴くならば, そして善き星において, 善き瞬間において (死に赴くならば), その者は善をなす者である, 王よ²⁸。
- (24) 人に苦痛を与えることなく, 悪行を清め, 自分の能力を尽くして²⁹行為を行った後に, 卑しからざる死によって³⁰(死に赴くならば, その者は善を為すものである)。
- (25) 毒, 首吊り, 焼死, 奴隷 (dasyu) の手による殺害, 動物 (の歯) による殺害, 家畜による殺害, これらが悪死 (卑しき死 *prākṛta vadha*) と言われる。
- (26) 善行をなす者たちは, これらと結びつかない。意図より生じた³¹同種の他の多くの悪死とも (結びつかない)。(Cf.Otto Strauss[1912]: p.(14).5)

²⁴bhūtātmā N. bhūtātmā rudrapisācaḥ na jāyate svarūpeṇa nāvīrbhavati yāvat pāpakaṣayaṃ / (「生き物の本体」すなわち, ルドラとピシャーチャは, 「生まれない」すなわち, 罪が滅するまでは自分の本性として現れない, という意味である) ここでの bhūtātman の訳語は, Deussen: sein Elementar-ātman, Ganguli: Jiva 中村 [2000] p.676 : 存在の我 Cf.Otto Strauss[1912]: p.(13),fn.2 Hopkins [Great Epic] p.39, fn.2: elemental spirit

²⁵manasaḥ paramo hy ātmā Cp. manasaḥ parama iti, manodraṣṭā ity arthaḥ / (「マナスより高位」とは, マナスの見者という意味である)

²⁶P. dvividhānām B.,K.: vīvidhānām

²⁷guṇataḥ Cp. guṇataḥ, viśayalobhāt, rajastamogunaṇviśeṣād vā / (「性質に従って」とは, 対象への欲望によって, あるいはラジャスとタマスという属性の相違によって, という意味である)

²⁸Deussen は, BhG 8.26 の参照を示唆している。

²⁹P.,K.: ātmaśaktītaḥ B. ātmaśaktībhiḥ

³⁰P. mṛtyunāprākṛteneha B.,K.: mṛtyunātmākṛteneha N. ātmākṛtene kālajena / (ātmākṛta とは, 時間から生じた (=自然に), という意味である) B.,K. はわかりやすく修正したものであろう。

³¹nābhisamdhijaiḥ Ca. abhisamdhijaiḥ, buddhipūrvakṛtaiḥ / (「意図より生じた」とは, 認識を前提になされた, という意味である) Cs. abhisamdhikṛtaiḥ / (意図をもってなされた, という意味である)

- (27) 善行の人々の靈魂たち (prānāḥ 氣息) は、(身体を) 捨てた後³²、上方に位置する、王よ。中程の善行をなす者たちの (靈魂たち) は中間に、悪行をなす者たちの (靈魂たち) は下方に位置する³³。
- (28) 人にとって敵は一人であり、無知に匹敵するような第二の敵はいない、王よ。人はそれに覆われ、結びついて、恐ろしい極めて残忍なもろもろの行為を行う。(韻律 Triṣṭubh (Upajāti?))
- (29) 人は、(無知からの) 覚醒のために³⁴、天啓聖典とダルマを身につけ、長老たちに近座すべし³⁵。かの (無知という) 敵は、努力によって征服されるべきものであり、王の息子よ、英知の矢によって揺さぶられれば³⁶ 遠く去るのである。(韻律 Triṣṭubh (Upajāti))
- (30) (人は) 梵行者として苦行によってもろもろのヴェーダを³⁷ 学び、(家長として) 能力に依じて、五種の祭式を実行し³⁸、ダルマを求めて森に行くべし。幸福を蓄積し³⁹、自分の家系を確立した後で。(韻律 Triṣṭubh (Upajāti) か。a 句不規則)
- (31) (人は) 楽しみを捨てても、自らを滅ぼしてはならない⁴⁰。チャンダーラであっても、人間であること (mānuṣyam) は得るのが極めて難しいのである⁴¹、息子よ。
- (32) なぜならばこれは最高の誕生 (yonih prathamā) であるからである、王よ。これに到達して後に、人 (ātman) は、善を特徴とするもろもろの行為によって救われるのである (śakyate trātum)。
- (33) 「どうすれば我々は、この誕生から消え去らないでいられるであろうか⁴²」というならば、王よ、人々は、天啓聖典を権威と見て、ダルマを行うべきである。

³²P. hitvā B.,K.: bhittvā

³³Deussen は Chāndogya Upaniṣad 8.6.6= Katha Upaniṣad 6.16 の参照を示唆している。しかし当該部分は以下のようなのである。

śataṃ caikā ca hṛdayasya nādyas tāsāṃ mūrdhānam abhiniṣṭaika /

tayor dhvamāyann amṛtatvam eti viṣvaññāyā utkramaṇe bhavanti utkramaṇe bhavanti / (Chand. Up. 8.6.6)

³⁴P.,K.: prabodhārthaṃ B. prabādhārthaṃ

³⁵P. upāsyam ca bhaveta B.,K.: upāsyā prabhaveta Ca.,Cp.: vṛddhān upāsyā kriyate yat karma tad vṛddhān upāsyam iti taddhitāntam / (長老たちに近づいて行う行為が、upāsyam というように taddhita 接尾辞 ya を語尾にもって表されている)

³⁶prajñāśareṇonmathitaḥ Ca. unmathitaḥ tāḍitaḥ / (「揺さぶられれば」とは、打たれれば、という意味である)

³⁷P. vedān B.,K.: vedam

³⁸P.,K.: saṃnisṛjyeha B. sannigrhyeha 五大供儀は Manu 3.70 に見られる。それらは、brahmayajña, pitṛyajña, devayajña, bhūtajajña, nṛyajña である。

³⁹P. śreyaś citvā B. śreyaśsthitvā K. śreyaḥ kṛtvā Cn. (reading śreyaśsthitvā) śreya 'tyartham tiṣṭhati saṃnaddho bhavati śreyaśsthitvā, mokṣakāmaḥ / āto maninkvanibvanipaś ceti kvanibanto 'yam śabdaḥ (Pāṇini 3.3.74) / (śreyaśsthitvā とは、幸福が過度に存在している、すなわち、十分準備ができていて、ということであり、解脱を願っている、という意味である。「長母音āで終わる動詞の後には、manin, kvanip vanip という接尾辞が来る」というように、この語は van(kvanip) を語尾にもつ。(śreyaś + sthā + van という解釈か。)

⁴⁰P. nātmānam avasādayet B.,K.: nātmānam sādāyēn naraḥ

⁴¹P. durlabham B.,K.: śobhanam

⁴²vipraṇāṣyema Cp. vipraṇāṣyema, vipraṇāṣo vṛthābhogena niṣphalīkaraṃ / (「消えるであろう」について、消滅とは愚かに楽しむことによって果報を損なうことである)

- (34) 人がこの世で⁴³より得難き人間に達していながら、ダルマを蔑視し、愛欲を本性とするならば、実にその人は踏み迷うであろう (vañcyate)。
- (35) しかし、光がなくならない限り⁴⁴、歡喜に導かれる目で⁴⁵生き物を灯火のごとく (愛情深く)⁴⁶見る者は、息子よ、
- (36) 優しい言葉によって、布施によって⁴⁷、そしてまた好ましい言葉によっても、樂と苦を等しくして、来世において幸福となるのである (mahiyate)。
- (37) サラスヴァティー川、ナーイミシャの森、プシュカラ川、そして地上にあるその他もろもろの聖地における⁴⁸布施、棄却、美しい姿⁴⁹、水によってさらに苦行のために (tapasā) 沐浴すべき⁵⁰身体、(韻律 Triṣṭubh (Upajāti))
- (38) 家々の中で (これらをもつ) 人々の息が絶えると、彼らは、稱賛されて運び出され、乘物によって火葬場へ到着し、そして清浄な規定によって荼毘される。(韻律 Triṣṭubh (Upajāti) か。d 句不規則))
- (39) 供犠、(家畜の) 養育、祭式、他者の祭式、布施、もろもろの善行の実行、能力に応じた祖靈祭、そして何であれ稱賛されるものを、人は誰でも⁵¹すべて自分のために行うのである。(韻律 Triṣṭubh (Upajāti) か。d 句不規則))
- (40) もろもろの法典、諸ヴェーダ、(ヴェーダの) 六支学は、人の王よ、汚れなき行為をする人の幸福のために規定されている。

ビーシュマは言った。

- (41) このすべては、かつて幸福のために大変偉大な尊者によってヴィデーハ王に対して語られたものである、人の王よ。

⁴³P. iha vai naraḥ B.,K.: dviṣate naraḥ

⁴⁴P. yāvad arcir na naśyati B.,K.: yāvad arthān na paśyati Cp. (reading yāvad artho 'nupaśyati) [Cp. na paśyati] yāvan muktis tāvat paryantaṃ tadanantarāsena na paśyatīti kecid vyācakṣate / vastutas tu, tena prītipurogeṇa cakṣuṣā sarvaṇi bhūtāni yo 'nupaśyati / (人は解脱 (に至る) までは、目的を、その数限りない本質 (?rasa) のために、見ることはない、とある人たちは語る。真実はしかし、その歡喜によって導かれる目によってあらゆる生き物を見る者は、という意味である)

⁴⁵prītipurogeṇa cakṣuṣā B.,K.: prītipurāṇena cakṣuṣā Cn. prītipurāṇena, prītyā ciraṃtanena / purogeṇeti pāṭhaḥ svacchaḥ / (prītipurāṇena とは、歡喜によって長い間、という意味である。purogeṇa という読みの場合、意味は明らかである)

⁴⁶dīpopamāni bhīṇi Cs. dīpopamāni, dīpavat snehādhinajivanāni / (「灯火のごとく」とは、灯火のように、愛情に依存して生きている者たちを、という意味である)

⁴⁷P.,K.: sāntvenānupradānena B. sāntvenānnapradānena

⁴⁸d 句 ye cāpy anye piṇyadeśāḥが修飾するのは c 句の sarasvatīnaimiṣapuṣkareṣu と考えられるが、格が一致しない。

⁴⁹P.,B.: śobhanā mūrtir K. śobhanā mūrtim

⁵⁰P.,K.: bhūyaḥ plāvyam B. bhūtaplāvyam

⁵¹P. mānavo yaḥ karoti B.,K.: mānavo 'yaḥ karoti

K. はこの後に以下の詩節を挿入している。

grhastānām ca sarveṣāṃ vināśam abhikā, nṅṣatām /

nidhanaṃ śobhanaṃ tāta pulīneṣu kriyāvatām // (=MBh.(P.) XII.286.10)

[287 章] (B.298 章, C.10942-10991, K.304 章)

ビーシュマは言った。

- (1) ミティラの王ジアナカは再び、偉大なパラージャラ仙にダルマに関する最高の定説を尋ねた。
- (2) 幸福 (sreyas 善) とは何か。道とは何か⁵²、バラモンよ。如何なる行為が滅しないか。どこに行けば (再び) 戻ることはないか。それを私に語るべし、偉大な尊者よ。

パラージャラ仙は言った。

- (3) 無執着が幸福である。知識が根本である。知識の道 (gati) が最高である。実行された苦行は滅することはない。地に蒔いた種子は滅しない⁵³。
- (4) 人は、アダルマからなる罌を切り、無畏によって為された布施を与え、ダルマにおいて喜ぶ時、完成 (siddhi) を得るであろう⁵⁴。
- (5) あらゆる生き物に対して無畏 (を与えること) は⁵⁵、牛千頭と馬百頭を与える者の布施を超える⁵⁶。
- (6) 目覚めた者は、対象の中に住みつつも、実は住んでいない。目覚めぬ者 (durbuddhi) は、もろもろの対象は存在しないのに、(対象と) 共に住んでいる。
- (7) アダルマは、英知ある者には付着しない。水が⁵⁷蓮の花弁につかないように。より大きな罪悪は、英知なき者に付着する。膠 (にかわ) が⁵⁸木の幹につくように。
- (8) アダルマは、原因に依存しているので⁵⁹行為者を離れることはない。行為者は、時至ると (yathākālam), そのすべてを獲得する⁶⁰。自己を完成し、自己の確信を見る者たちは (ātmapratyayadarsīnah), (その獲得によって) 心が引き裂かれることはない⁶¹。
- (9) 知覚器官と行為器官の惑乱した者は覚醒することなく⁶²、もろもろの浄不浄のもの

⁵²kā gatiḥ Cs. gatiḥ paramagatisādhanam / (「道」とは、最高の境地への手段のことである)

⁵³vāpaḥ kṣetre na naśyati Ca. kṣetre tīrthādau, vāpo dānam / (「kṣetre」とは、聖地などにおいて、という意味である。vāpa は布施である) Cn., Cp.: vāpaḥ dānam, kṣetre satpātre (Cn. bijam iti pāṭhe bijam iva nyupam / (vāpa は布施である。kṣetra は、真の器である。「種子 bija」という読みの場合、種子のごとく蒔かれた、という意味である)

⁵⁴P. siddhim avāpnuyāt B., K.: siddhim avāpnute Cn. siddhim, anivartanaṃ sthānam / (siddhi とは、不還の境地である)

⁵⁵abhayaṃ Cp. abhayadānaṃ sannyāsaḥ / (「無畏の布施」とは捨離である)

⁵⁶P. taddānam ativartate B., K.: sadā tam abhivartate

⁵⁷P. āpaḥ B., K.: payaḥ

⁵⁸jatu Ca. jatu lākṣā, kaṣṭhe eva sajjate / (jatu とは樹脂である。それは木にのみ固着する)

⁵⁹kāraṇāpekṣī Cn. kāraṇā, phaladānātmikā kriyā, tannivṛtтыapeskṣī / (もろもろの原因とは、結果を与えることを本性としている行為である。その消滅に依存している、という意味である) Cs. phalānubhavākhyam kāraṇāpekṣitvam / ()

⁶⁰P. tat sarvam abhipadyate K. tataḥ samabhipadyate

⁶¹bhidyante Cn. bhidyante, karmaphalair na kliśyanti / (bhidyante とは、行為の結果によって苦しむことはない、という意味である) Cp. teṣāṃ bhedabuddhir na jāyate / ((bhidyate とは) 彼らには異なるという認識は生じない、という意味である) Cs. bhidyante, ātmasvarūpaḥ pṛthagbhavanti / (bhidyate とは、自分の本質からは異なっているということである)

⁶²yo na buddhyate Cn. budhyate, duśceṣṭitam iti śeṣaḥ / (budhyate とは、悪行を為したことを、と補われる)

に執着して⁶³、大変に大きな恐れを得るのである。

- (10) 執着を去り、怒りに打ち勝って常に正しくいる者は、対象の中にも、罪悪と結びつくことはない。
- (11) ダルマを堰として岸に固定された者は⁶⁴、沈むことはない⁶⁵。増水した流れがやってきて⁶⁶(水が?)集積されて (saṃcaya) 水量が増えて(とどまっている)かのようなのである(?)⁶⁷。
- (12) 透明な宝石が太陽にある光を集中によって⁶⁸、受け取るかのごとく、ヨーガは、(心の)集中によって (samādhinā) 行うのである、虎のごとき王よ⁶⁹。
- (13) この世界において、胡麻の実の性質 (guṇa) は、花と結びついて⁷⁰それぞれに美しくなる⁷¹ように、地上で清められた人々には、依り所(となるもの)に応じて⁷²、よい性質 (?sattvagūṇa) が生じるのである。(韻律 Jagatī (Vaṃśasthavila))
- (14) (人は)この世界では(? ihate)、妻たち、もろもろの獲得物、よき馬の乗物、そして何であっても様々の行為を捨てない⁷³。(しかし)人にインドラの天への思いの生じた時には、この者の意識 (buddhi) は、もろもろの対象に対しては断ち切られる⁷⁴。(韻律 Jagatī (Vaṃśasthavila))

⁶³P. śubhāśubheṣu saktātmā B.,K.: śubhāśubhe prasaktātmā

⁶⁴maryādāyāṃ dharmasetur nibaddho Cp. maryādāyāṃ nibaddho vardhata eva / (岸に固定された者は、増大するのみである) Cv. maryādāyāṃ rakṣitāyāṃ / (「岸に」とは、守られた、という意味である)

⁶⁵P.,B.: naiva sīdati K. nāvāsīdati

⁶⁶P. puṣṭasrota ivāyattaḥ B.,K.: puṣṭasrota ivāsaktaḥ

⁶⁷saṃcaya の意味が確定できない。あるいは、「増水した流れがやってきた大きな山 (saṃcaya) のようである」という意味か。 N. saṃcayas tapovṛddhiś ca sphīto bhavaty arthaḥ / (saṃcaya とは苦行の増大であり、それが大きくなっている、という意味である) Ganguli は, Nilakaṇṭha に拠って、saṃcaya を dharma と苦行の集積と解して、この部分を次のように訳している。

As a dyke built across a river, if not washes away, causes the waters thereof to swell up, even so the man who, without being attached to objects of enjoyments, creates the dyke of righteousness whose materials consist of the limitations set down in the scriptures, has never languish. On the other hand, his merits and penances increase. (Ganguli: vol.IX,p.367)

⁶⁸samādhinā Cn. samādhinā, niyamena dr̥ṣṭānte / dār̥ṣṭāntike tu samādhinā, dhyānena / (samādhinā とは、比喩においては、法則によって、喩えられるもの(ヨーガ)においては、瞑想によって、という意味である) Cp. samādhinā virajikaratṇena / (samādhinā とは、埃を除くことによって、という意味である) samādhi は、水晶の比喩における光の集中と、ヨーガの精神集中と、両方のという意味で用いられている、と思われる。

⁶⁹(Deussen は、この詩節に関連して、Yoga Sūtra 1.41 の参照を示唆している。

⁷⁰P. puṣpasamśrayāt B.,K.: puṇyasamśrayāt

⁷¹yāti guṇo 'tisaumyatām Cn. saumyatām, ramyatām / (美しさとは、心喜ばしき状態である)

⁷²yathāśrayaṃ Cn. yathāśrayaṃ, punaḥ punar vāsanābhyāsād bahulaṃ, tadabhāve 'lpaḥ / (「依り所(となるもの)に応じて」とは、何度も何度も潜在力が反覆することによって多く、それがなければ、少なく、ということである)

⁷³P. jahāti dārān ihate na saṃpadaḥ sadaśvayānaṃ vividhāś ca yāḥ kriyāḥ B. jahāti dārāṃś ca jahāti saṃ padam ca yānaṃ vividhāś ca saktiyāḥ K. jahāti dārān vividhāś ca saṃpadaḥ padam ca yānaṃ vividhāś ca saktiyāḥ / ihate の語形不明。B.,K. はそれぞれまったく異なる読みをしている。

⁷⁴viṣayeṣu bhidyate Cn. bhidyate, śabdādibhyo vyāvṛtā bhavati / (「断ち切られる」とは、音声などに無関心になる、という意味である)

- (15) もろもろの対象に執着する意識 (prasaktabuddhi) をもつ者、時には⁷⁵自分の幸福を意識する者は⁷⁶、どんなものにも追従する心によって (sarvabhāvānugatena cetasā), 王よ、餌によって魚が引きづられるかのように、引きづられるのである。(韻律 Jagatī (Vamśasthavila, b 句不規則))
- (16) 死すべき者の世界は、集合を伴い⁷⁷、相互に依存し⁷⁸、芭蕉の木の髓のごとく実体がなく、船が水中に沈むかのように、沈むのである。(韻律 Jagatī (Vamśasthavila))
- (17) 人にはダルマを行う時 (dharmakāla) は決まっていない。そして一方、死は人を待たない。人が死の口に近く存在する時⁷⁹、ダルマを行うことは常に善いことである⁸⁰。(Cf. Otto Strauss [1912]: p.(24), fn.1)
- (18) たとえば、自分の家にいる盲人が、集中した心で練習することによってこそ⁸¹(外を) 歩くことができるように、英知ある者は、集中した心によってかの道を (tām gatim) 進むことができるのである (gacchati)。
- (19) 死は誕生の中にある⁸²と言われる。誕生は、死に基づいている。もろもろの解脱の教義を知らぬ者は、束縛されて、(死と誕生を?) 車輪のように回るのである⁸³。
- (20) 蓮のひげ根は付着している⁸⁴土をすぐに解き放つ⁸⁵ように、人のアートマンはこの世でマナスによって解放される。マナスはアートマンを(ヨーガに) 導き⁸⁶、(その結果) 人はアートマンに結びつく⁸⁷。

⁷⁵P. kadācana B., K.: kathamcana

⁷⁶P. yo B., K.: na B., K. では、「自分の幸福をまったく意識しない者」という意味になる。

⁷⁷P. saṃghātāvān B., K.: saṃghātavan(d) Cn. saṃghātavat, dehendriyādisamudāyavat / (「集合のごとく」とは、身体と感官などの集合のように、という意味である) Cs. kāṣṭhādisamūhavat / (木などの集合体のごとく、という意味である) Cv. putramitrādisamūhavān / (息子や友人などの集合体を伴う、という意味である)

⁷⁸apāsritaḥ Cn. apāsritaḥ, upakāraḥ / (「依存し」とは、補助し、という意味である)

⁷⁹P., B.: mṛtyumukhe 'bhivartate K. mṛtyumukhān nivartate

⁸⁰P. kriyā hi dharmasya sadaiva śobhanā B., K.: sadā hi dharmasya kriyaiva śobhanā

⁸¹abhyāsād eva quad N. aḡocare 'pi mārge gurūktayuktyā 'byāsād eva gacchatiṭy arthaḥ / (「練習することによってこそ」とは、領域の外の道であっても、師匠に言われた論理によって練習することによってこそ行くことができるのである、という意味である)

⁸²janmani Cn. janmani, janmanimittam / (「誕生に中にある」とは、(死は) 誕生を原因としている、という意味である)

⁸³B., K. は次に以下の三行を挿入している。

buddhimārgaprayātasya sukhaṃ tv iha paratra ca / (=P.287.34cd)

vistarāḥ kleśasaṃyuktāḥ saṃkṣepās tu sukhāvahāḥ / (=P.287.35ab)

parārthaṃ vistarāḥ sarve tyāgam ātmahitaṃ viduḥ // (=P.287.35cd)

⁸⁴mṛṇālo 'nugatam Cn. (mṛṇālānugatam) mṛṇāleti luptavibhaktikam / (mṛṇāla は、活用語尾が消失した形である)

⁸⁵muñcati Cp. aticikṣaṇatvāt / ((ひげ根は) あまりにも滑らかであるため、「解き放つ」のである)

⁸⁶praṇayate, Cn. praṇayate, yogonmukhaṃ karoti / (「導く」とは、ヨーガの準備をするという意味である) Cp. bhṛtyabuddhidvayenopatiṣṭhate / (「導く」とは、保持すべき二種の意識によって近づく (?), という意味である)

⁸⁷sa enam abhiyujjati Ca. (reading anuyujyati) paścāt prerayati / (anuyānti とは、後で動かす、という意味である) Cn. abhiyujjati, parasyāṃ kāṣṭhāyaṃ pravilāpayati / (「結びつく」とは、最高の高さにおいて消滅させる、という意味である) B., K. は、この後に次の行を挿入している。

yukto yadā sa bhavati tadā taṃ paśyate param /

- (21) 他の目的に従事しつつ、しかし(それを)自らなすべきことと考える者は、もろもろの感官の対象に執着しつつ⁸⁸、自らなすべきことから逸脱する⁸⁹。
- (22) 下方には動物の道 (gati) と、天界には最高の道がある。この世で英知ある者とそうでない者のアートマンは、自ら為したもろもろの行為によって⁹⁰、(いずれかを)得るのである。
- (23) 土でできた器が焼かれると液が注がれる⁹¹ように、身体も苦行によって焼かれると⁹²対象を⁹³得る。
- (24) (現在) もろもろの対象を得る⁹⁴者は、疑いなく(死後)(対象を)享受することはないであろう⁹⁵。しかし、アートマンがもろもろの享受を(現在)捨てるならば、将来(幸福を?)享受することを確信するであろう⁹⁶。
- (25) 霧によって⁹⁷覆われ、性欲と食欲に耽る (śiśnodaraparāyaṇaḥ) 覆われたアートマンをもつ者は、生来の盲人のごとく、道 (panthānam) 認識することはない。
- (26) 商人が海から⁹⁸目的に応じて (yathārtham) 財産を得るように、死すべき者の海にいる人間にとっては、行為と認識によって⁹⁹道が(得られる)。
- (27) 昼と夜からなる世界で、老いの姿で近づきながら¹⁰⁰、死は生き物たちを呑みこむ。蛇が息 (pavanam 空気?) を呑むように。

⁸⁸P. saktāḥ san B. saṃyuktaḥ K. saktāḥ sa

⁸⁹P.,K.: parihīyate B. parimucyate

⁹⁰P. svakṛtair B.,K.: sukrṛtair

⁹¹P. pakve yathā vai nyasyate dravaḥ B. pakve yathā vai na śyati dravaḥ K. pakve yathā vai naśyati dravaḥ Cn. na śyati, na kṣīyate na kṣarati ity arthaḥ / śyati śo tanūkarāṇe ity asya rūpam / (na śyati とは、na kṣīyate 滅らない、na kṣarati 流れない、という意味である。śyati は、「語根 (?) śa は、短縮形において (?)」という理由で、この形である) P.B.K. とも pakve であるが、Deussen は apakve として、「焼かれていない間は、水は流れる」と解している。

⁹²śariraṃ tapasā taptam Cv. ataptam ced viśayam aśnute, taptam ced viśayadravaṃ muñcatīti dṛṣṭānusāri dārṣṭānto draṣṭavyaḥ / (「苦行によって焼かれた身体」に関して、焼かれていなければ対象を得る、焼かれているならば対象の流れを開放する、という比喩に対応して、喩えられるものは理解されるべし)

⁹³viśayam Cn. viśayam, brahmalokam / (対象とは、ブラフマンの世界である) N. reads *brahmalokāntam*. Cs. svargākhyam apavargākhyam vā sukham / ((対象とは) 天界と呼ばれる、あるいは解脱と呼ばれる、安楽である)

⁹⁴aśnute Cn. aśnute, āloka iva vyāpnoti, prakāśayati, śākṣī / (「得る」とは、見者が、光の中であるかのごとく満たす、照明する、という意味である)

⁹⁵na sa bhakṣyaty Cv. na bhokṣyati, paratra bhogān na bhokṣyati / (他の世界では、享受することはないであろう、という意味である)

⁹⁶bhoktuṃ vyavasyati Cv. vinaśyati pāṭhe, bhogārtham janmāntaralābhāyaiva mriyate / (vinaśyati という読みにおいては、享受のために、すなわち次の誕生の獲得のために、死ぬ、という意味である)

⁹⁷nihāreṇa Ca. nihāreṇa, atyantahāriṇā mohena / (「霧によって」とは、完全に運び去るものである迷妄によって、という意味である)

⁹⁸samudrād vai Cs. samudrāt, samudraṃ prāpya / lyablope pañcamī / (「海から」とは、海に達して、という意味である。Gerund を作る接尾辞 ya の脱落した場合、奪格が用いられる)

⁹⁹karmavijñāto Ca. karmavijñātaḥ, karmavijñānābhyām militābhyām / na tu akarmanā aśuddhasattvena jñānam apīti bhavaḥ / (「行為と認識によって」とは、結びついた行為と認識によって、という意味である。しかし、祭式を行わない不浄な人によっては知識も(得られ)ない、ということである)。Ca. は karma を祭式と解しているようである。

¹⁰⁰P.,K.: saṃsaran B. saṃsaran

- (28) 人は生まれると(かつて)自ら行った行為(の結果)を得る。誰も、この世で好ましいことであれ好ましくないことであれ、行わなかった(行為の結果を)得ることはない¹⁰¹。
(Cf. Otto Strauss[1912]: pp.(20)-(21), *nākṛtvā labhate kaścit kiṃcid atra priyāpriyam*)
- (29) 眠っていても、外出していても、休息していても、もろもろの対象の中で (*viṣayeṣu*) 活動していても、常に善悪の諸行為(の結果)は人に至るのである。
- (30) (人は)向こう岸に¹⁰²達して、再び渡ることを決心しない¹⁰³。なぜならば、この者には、(再度)大海に落ちることは困難な行為と見えるからである。
- (31) 荷物を積まれた¹⁰⁴船が大海で綱で引き戻されるように、心 (*manas*) は、(ヨーガの)修習によって¹⁰⁵身体を(対象から?)引き戻す¹⁰⁶。
- (32) 大海の近くで、異なった川が結びつけられる¹⁰⁷ように、今や、人の本性(?*prakṛti*)は、ヨーガ(の実修)によって常に(マナスに?)結びつけられる¹⁰⁸。
- (33) 様々な愛着の罫によって捉われたマナスをもつ人々は、物質界に住して(?)¹⁰⁹(物質界に(?))沈むのである。砂上の家が水中に(沈む)かのごとく。
- (34) 身体という家に住み¹¹⁰、沐浴場のごとき清浄さをもち¹¹¹、認識の道に至った靈魂(*dehin*)には、この世でもあの世でも安楽がある。
- (35) もろもろの広い道は煩惱と結びつき、もろもろの狭い道は¹¹²安楽を運ぶ。もろもろの広い道はすべて、他(の目的)のためである。(狭い道である)棄却は自分の幸福である、と人々は知っている。
- (36) 友人の集団は、願望より生じる。親族たちは動機を本質とする。妻・奴隷・息子は¹¹³、(それぞれ)自分の利益を追求する¹¹⁴。

¹⁰¹P.,K.: *nākṛtaṃ labhate* B. *nākṛtvā labhate*

¹⁰²*anyat tīram* Cs. *vedāntasāṃkhyayogebhyo 'nyat tīram* / (「向こう岸に」とは、ヴェーダンタ、サーンキヤ、ヨーガとは別の岸に、という意味である)

¹⁰³(na) *vyavasyati* Cs. *na vyavasyati, nārhati* / (「決心しない」とは、する価値がない、という意味である)

¹⁰⁴P. *bhārāvasaktā* B.,K.: *bhāvāvasannā*

¹⁰⁵*mano 'bhiyogād vai* Cv. *manaḥ abhiyogāt, snehāt* / (「心 (*manas*) は、修習によって」とは、愛情によって、という意味である)

¹⁰⁶P. *pratikarṣati* B.,K.: *pracikīrṣati* Cn. (*reading pracikīrṣati*) *antarbhāvitaṅyartho 'yam / kārayitum icchatity arthaḥ* / (「作ることを願う」とは、この語に含まれている使役の接辞 *i* の意味をもっている。作らせるのを願う、という意味である)

¹⁰⁷P. *saṃyūtāḥ* B.,K.: *saṃśritāḥ*

¹⁰⁸P. *abhisamśyūyate* B.,K.: *abhisamśriyate*

¹⁰⁹*prakṛtisthā* N. *prakṛtisthāḥ ajñānavaśāḥ* / (「物質界に住して(?)」とは、無知に支配されて、という意味である) 前詩節とこの詩節に *prakṛti* の語が用いられているが、文脈から意味を限定することは難しい。

¹¹⁰P.,K.: *śārīragṛhasaṃsthasya* B. *śārīragṛhasaṃjñasya*

¹¹¹*śaucatīrthasya* Cn. *śaucam āntaraṃ bhāvasuddhiḥ, bhāyaṃ tu prasiddham* / (内面的な清浄さは、心の清浄であり、外面的な清浄さはすでに周知である)

¹¹²*saṃkṣepāḥ*, Cn. *saṃkṣepāḥ, tyāgādayaḥ* / (「もろもろの狭い道」とは、棄却などである) Cp. *saṃkṣepāḥ, nirvāhamātrprayojakaparigrahāḥ* / (「もろもろの狭い道」とは、運搬のみを目的とする受領である) Cs. *saṃkṣepāḥ, karmatyāgaḥ* / (「もろもろの狭い道」とは、行為の棄却である)

¹¹³P. *bhāryā dāsās ca putrās ca* B.,K.: *bhāryā putrās ca dāsās ca*

¹¹⁴P.,K.: *anuyujate* B. *upabhuñjate*

- (37) 母も父も誰かに対して何かをすることはしない。人は、布施を道の食物として (?)¹¹⁵, 自分の行為の結果を得るのである。
- (38) 母, 息子, 父, 兄弟, 妻, 友人は, 金貨の面における, 目 (?akṣa) の記号のごとく, 置かれている¹¹⁶。
- (39) 以前に為されたあらゆる善悪の行為は, 人の自我 (ātman) へとやってくる¹¹⁷。行為の結果が近づいたのを知って, 内的自我 (antarātman) は認識器官 (buddhi) を駆り立てる。(韻律 Triṣṭubh (Upajāti))
- (40) (自分の) 決心に基づいて, 友人たちに近づく者は, いつ何を為そうとも決して失敗することはしない。
- (41) 二心なく, 集中し, 力強く思慮深い賢者を, 幸運 (śrī) は決して見捨てない。光線たちが太陽を捨てることはないように。
- (42) 信仰心と決心をもって, 適切に, 自惚れなく¹¹⁸, 知恵をもって, 非難すべきもの

¹¹⁵P. dānapathyodano jantuḥ B., K.: dānapathyaudano jantuḥ

¹¹⁶P. aṣṭāpadapadasthāne tv akṣamudreva nyasyate B. aṣṭāpadapadasthāne dakṣamudreva lakṣyate K. aṣṭāpadapadasthāne lākṣāmudreva lakṣyate Ca. aṣṭāpadaḥ sāriphalas tasya padasthāne ṣaḍūvā* pañcakatrike svakṣatrike svakṣasūtreva** cihnabhūtā rekhā / (aṣṭāpada とは, チェス盤である。その「padasthāne(足の部分?)における」とはすなわち, ṣaḍūvā の (?), 十五からなる (?), 三種のよい目をもつものにおける (?), ということである。「svakṣasūtra(馬車の紐?)のごとく」とは, 記号となった線である)

*ṣaḍūvā 語形不詳

**svakṣasūtreva svakṣasūtra iva の double sandhi か。

Cn. aṣṭāpadapadaṃ suvarṇakārṣāpaṇas tasya sthāne, he dakṣa, yathā mudrā rekhāviśeṣās tadvat / svarṇavat svadr̥ṣṭam eva svābhuyadayahetuḥ, rekhāvad bāndhavādayo nāmamātram / svarpare rekhaiva* nirdaive mātrādayo niṣphalā ity arthaḥ / dakṣa sūtreṇa lakṣyate iti pāṭhe, sūtreṇa sūcakena mudrayeti yāvat / yathā mudrayā kārṣāpaṇaviśeṣo lakṣyate. evaṃ mātrādinā jātivīśeṣaḥ ity arthaḥ /

*svarpare rekhaiva N. svarpare rekheva /

(aṣṭāpadapadaṃ とは, 金貨である。その表面に, おおダクシャよ, mudrā すなわちもろもろの特別な線があるが, そのごとく, という意味である。金貨のごとく, 自身の発生の原因は自身の不可見力であり, 線のごとく, 親戚などは名称にすぎない。svarpara における線のごとく (?), 神意のないところでは, 母などは結果をもたらさないという意味である。「dakṣa sūtreṇa lakṣyate」(ダクシャよ, 線によって示される) という読みの場合, sūtra すなわち指し示すので, mudrā 印ということである。印によって貨幣の特性が示されるのと同様に, 母などによって誕生の特性が (示される), という意味である)

Cp. aṣṭāpadaṃ sāriphalaṃ, tasya padasthāne cihnasthāne aṅkamudreva cihnarekheva mātrādayo lakṣyante / na tu hitāya ke 'pi samarthā iti bhāvaḥ / (aṣṭāpada とはチェス盤である。その padasthāne すなわち記号のところ, 釣り針の形のごとく, 記号の線のごとく, 母などが記されている。しかし幸福 (hita 勝利?) のためにはどれも力はない, という意味である)

Cs. aṣṭāpadaḥ śarabhaḥ, tasya padasthāne, padanyāse / akṣamudreva, dyūtasāadhanavidhānakāṣṭhavat, bhrāntya ganyata ity arthaḥ / (aṣṭāpada とは鹿の一種である。その padasthāne すなわち足跡において, 「目の記号のごとく」すなわち, 賭博の勝ちを決める木片 (の数) のごとく (?), 間違って数えられた, という意味である)

Cv. aṣṭāpadapadasthāne, suvarṇāśrayagranthisthāne / (aṣṭāpadapadasthāne とは, 金貨の入れ物 (?) の結び目のところに, という意味である)

c 句の aṣṭāpadasthāne に対して, 注釈者は異なる解釈を提示している。そして, この語に関連した d 句は 3 者が異なる読みを伝えている。 Cf. Hopkins [1902]: p.137, fn.1: The later epic, by the way, has two coins not previously recognized, besides the Roman denarius (implied), namely, the *kākiṇī* and *aṣṭāpadapada* (a gold *kārṣāpaṇa*), xii.294.16; 299.40.

¹¹⁷yānti N. yānti phalaṃ dātum iti śeṣaḥ / (果報を与えるためにやってくる, と補われるべきである)

¹¹⁸vismayād Cn. vismayāt, smayo garvaḥ, tadabhāvāt / (「自惚れなく」とは, smaya とは高慢さであり, (visna わち) それがない状態によって, という意味である)

がない者が行う¹¹⁹ 目的は¹²⁰ 失敗することはない。

(43) 人はすべて、必ず自分で自分の善悪の行為を母胎から獲得する。その(善悪の)両者は本人によってかつて為されたものである。そして、誰も避けることはできず、時至れば(身体を)引き裂く者である¹²¹ 死は、行為を終末へと(antikam) 到らしめる。あたかも風(samagati)が、鋸によって作られた木の屑を(吹き飛ばすかのようか?)¹²²。(韻律 Atidhṛti (Śārdūravikrīḍita), cf. Deussen, p.586,fn.)

(44) 人はすべて、自分の行った善悪の行為によって、為された通りに、自分の姿、自分の作った多くのもの、家系の継承、財産と繁栄の蓄積を獲得するのである。(韻律 Jagatī (Vaṁśasthavila) (Cf. Otto Strauss[1912]: p.(14),fn.1)

ビーシュマは言った。

(45) 以上のように、王よ、ジャナカ王は賢者によって正しく¹²³ 語られた。ダルマを知る者たちの中ですぐれた者であるジャナカ王は、これを聞いた後、最高の喜びを得たということである。

¹¹⁹ P. yam ārabhaty anindyātmā B. samārabhed anindyātmā K. ya ārabhaty anindyātmā

¹²⁰ P.,B.: so 'rthaḥ K. so 'rthāt

¹²¹ P. kālena viccheditā B.,K.: kālena vicchedinā

¹²² dāroḥ cūrṇam ivāśmasāravihitam Ca. yathā dāror aśmasāreṇa lohamayena krakacena pātane karmāntikam karmādhyakṣam prati kāṣṭacūrṇam yāti, evaṁ karmaṇā vihito mṛtyuḥ kāle prāpte karmakāriṇam yāti eva / (あたかも、木が、鋸によって、すなわち鉄でできた鋸によって、裂かれると、行為者(karmāntika)、すなわち行為の支配者、の前で(?prati)、木屑に至るように、それと同様に、行為によって規定された死は、時が至ると、行為者(karmakārin)となる) Cn. dāroḥ kāṣṭasya cūrṇam aśmasāravihitam krakacakṛtam, samā śitoṣṇasāmyavatī gatir yasya sa samagatir vāyuh dārucūrṇam iva mṛtyur naram kālenāntam prāpayed ity arthaḥ / (dāru すなわち木の、屑は、aśmasāravitam すなわち鋸によって作られる。冷たさと熱さを等しくもって進行するもの、それが samagati であり、すなわち風である。風が木の屑を(吹き払う?)ごとく、死は、時至れば人を終わりに達さしめる、という意味である)

Cp. aśmasāravihitam krakacavidāraṇajanitam dāroḥ kāṣṭasya cuurṇam yathādhyakṣam prati vāyur nayati evam mṛtyur api / Cs. aśmasāravihitam, lohayantrakṛtam, karmāntikam karmakāram prati tṛtsam mukham yathā gacchati tadvat / (aśmasāravihitam すなわち、鋸によって裂かれたため生じた、dāroḥ すなわち木の、屑を、風が眼前で運ぶのと同様に、死もまた(人を眼前で運ぶ)、という意味である)

Cs. aśmasāravihitam, lohayantrakṛtam, karmāntikam karmakāram prati tatsam mukham yathā gacchati tadvat / (aśmasāravihitam すなわち 鉄の道具によって作られた(木の屑が)、karmāntikam すなわち行為者、prati すなわちその者の目の前で、去るように、それと同様に、という意味である)

Cv. aśmasāreṇa ayasā, vihitam jalūkākāreṇa dvimukhatayā kṛtam, dārau phalakadvaye, [u]cchūnam nibaddham yantram iva / (dārocchūnam ivāśmasāravihitam という読みをとっているか) (aśmasāreṇa すなわち鉄によって、vihitam すなわち鋸の行為によって(?削られた、という意味か) 2つの面をもつものとして作られ、dārau すなわち2つの木の面に、ucchūna (膨れた) すなわち繋がれた(?), 留具(?)のごとく) この比喩の意味はよくわからない。木片を縛っていた留金が、時の経過あるいは別の理由によって、木片を破碎してしまうように、死が身体を壊してしまう、ということであろうか。

¹²³ P. yathātathyam B.,K.: yāthātathyam